慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	plutôtについて
Sub Title	A propos de plutôt
Author	川口, 順二(Kawaguchi, Junji)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1993
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.63, (1993. 3) ,p.69(288)- 86(271)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	松原秀一教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00630001-0086

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

plutôt について

川　口　順　二

0. 緒言

plutot は plus tôt という 2 つの形態が 1 つの単語として現れているものだが，「より早く」がなぜ「むしろ，どちらかと言うと」の意味になるのかは分かりにくい。にも拘らず英語の sooner, rather，ドイツ語の eher，ロシア語の skoree などは類似の意味変化を示している。Traugott & König (1991) は文法化という観点から，Dietrich & Napoli (1982) を受けて，(i) 時間的解釈 (earlier) が the sooner the better という会話的含意が意味に取り入れられることにより (ii)「より好ましい」という preference 解釈が生まれ，次に A が B より好ましい時に B が拒否，排除の対象として解釈されるところから，(iii)「B ではなくてむしろ A」という排除の解釈 (denial 解釈) が派生されると考える。(ii) は文主語の好みを表すが，(iii) では話者が表現 A が B よりも適切だとする判断を表すとされる。フランス語の plutôt はこの一般的図式にのっとっているように見えるが，冒頭に述べたように (i) から (ii)，(iii) への変化は必ずしも直観的に分かりやすいものではなく，また rather と同様他の用法も存在する。本稿は現代語の plutôt の諸用法を記述して，意味の派生の問題を考える出発点を準備するのが目的である。

1. 辞書類の用法分類

辞書類はほぼ類似した分類・記述をしている。大きく分けて (α) connec-

tive として2つの項を関係づける用法と，（β）形容詞，副詞などで示される特性の度合いに関わる用法とがある。（α）を〈A plutôt que B〉，（β）を〈plutôt A〉と表記しよう。2つの分類のうち（α）は（α1）préférence（0．の用法（ii））と（α2）訂正用法（0．の用法（iii）），（β）は（β1）「特性の存在」と（β2）「強い程度」（par euphémisme, par litote）と下位分類される。夫々の例を挙げておく。

(1) J'aime mieux crever tout de suite plutôt que d'aller moisir en prison. (P. Gerrard)（α1）

(2) -- [...] j'ai dû me coucher vers dix heures...
--Ce n'était pas plutôt vers minuit?
--C'est bien possible. (Exbrayat)（α2）

(3) Je roule plutôt lentement parce que je sais que tu prends facilement peur. (J. Laurent)（β1）

(4) Elle est plutôt moche, sa femme! (*GR*)（β2）

この4つの用法が（α），（β）2つの用法に大きく分類される根拠は〈que B〉の表現が有るか否かに懸かるように見えるが，（α）ではしばしば〈que B〉がコンテクストで明らかなために省略される。例えば

(5) Mais Jehanne, dans ses propos, ne parvenait guère à se montrer sotte. Elle déconcertait plutôt. (Laurent)

は Elle déconcertait plutôt qu'elle ne se montrait sotte と解釈される。同様に

(6) Cette conversation, qui était plutôt un monologue, s'était poursuivie pendant leur repas. (Laurent)

でも qui était plutôt un monologue qu'une (vraie) conversation とパラフレーズできる。(5)-(6)は（α2）の例だが，（α1）でも

(7) Parlez-moi plutôt de votre fille[注1]

は，例えば Parlez-moi de votre fille plutot que de vous-même という解釈である。他方 *GR* は Plutôt laide que jolie を「より適切な評価」の表現という項目に入れている。これは（α2）用法と考えられるが，この例と，

(8) (Maigret が Monique から事情聴取する場面の後，著者は Monique の描写に移る)

Monique était plutôt jolie. Elle ressemblait tout à fait à sa mère (G. Simenon)

とを比べると，(8)で Monique était plutôt jolie que pas jolie とも言えそうである。この問題は3．3．で触れるが，（α2）と（β1）の連続性を示唆する。（β2）のみは〈que B〉の再構築が考えにくいが，これについては3．4．で考察する。従って少なくとも意味的には（β2）を除いては〈que B〉の表現が現れていなくとも B が構築されていると考えられる。

2．仮説

ここでは仮説をおおまかに提示し，細部については記述を通して述べていくことにする。

現代語の〈A plutôt que B〉は諸用法に共通する不変化要素として，より高い妥当性 une plus grande conformité をマークすると仮定する。妥当性とは関係概念であり，次の様に規定する。ある関係 R がある時，この中のある項 B を A で置き換えることにより R がより事実に近づくか，またはより望ましい状況に近づくなら，A は B よりも妥当性があると言う。従って妥当性は事実の世界と望ましさの世界で機能するパラメターである。B を含む関係を R(B)，A を含む関係を R(A) と書くことにしよう。〈A plutôt que B〉は R(A) の方が R(B) よりも妥当であることをマークする。

（α）用法は質的分野に関わり，妥当性の低い R(B) は R(A) 構築の前に既に構築されたものであり，これを基に R(A) との比較が行われる。

（β）用法は量的分野の解釈で，B は A の欠如を示す否定概念であり，A 構築と共に構築され，A の方が妥当性が高いことが表現される。

R(A) は断定の対象として時空間の中に位置づけられる可能性として構築される場合と，主体が望ましいこととして想像上構築する場合とがある。訂正の（α2）用法は前者の，préférence の（α1）用法は後者のケースである。また（β）は（α2）と同じく前者の解釈である。

R(B)はR(A)を断定する主体がコンテクト内で否定することはあってもplutôt文での否定の対象とはしない。(α2)の言い直し表現ではR(B)の成立を認めた後でむしろこれを否定する方向に変わる。しかしR(B)が必ず否定されるとは言えないことは後で見ることになろう。

R(A)の構築主体をS(R(A)), R(B)のをS(R(B))としよう。これらの主体は発話主体と同定されるか否か,(α1)の受益主体と同定されるか否かなど様々なケースがあり,主体間関係のモダリティはこのレヴェルに位置する。

これらのパラメターを用いてplutôtの諸用法を統一的に記述することを試みていく。

3. 用法記述

3.1. 訂正のplutôt (α2)

R(A)とR(B)が同一の事行Xについて構築されている場合はXがR(A)なのかそれともR(B)なのかが問題とされる。例えば

(9) Il lui faisait face et elle devinait plutôt qu'elle ne les voyait ses yeux très rapprochés d'un bleu violent et sa bouche aussi droite qu'un trait rageur. (L. Oriol)

では, R(A) = 〈elle deviner ses yeux...〉 と R(B) = 〈elle voir ses yeux...〉とが比較されてR(A)の方がより事実に近いと言われている。この様な解釈を訂正解釈とする。Traugott & König は Thompson (1972) の分析を踏襲し,

(10) He recites rather than sings

について

(11) [the metalinguistic *rather than* as in (10)] expresses the speaker's preference for the formulation *He recites* and denial of a presupposed or expressed *He sings*.

と述べ, (10)に

(12) I prefer to say/assert that he recites and deny that he sings

というパラフレーズを与えている。しかし(9)は「X は R(B) と言うよりもむしろ R(A) である」という解釈で，この時単純に R(B) が denial の対象であるとは言いにくい。「X は R(B) ではあるが，しかし R(A) と言った方が妥当である」という解釈がより適当である。特に先に挙げた(6)では R(B) = 〈X être une conversation〉, R(A) = 〈X être un monologue〉 とすると，両立不可能に見えるが，かと言って R(B) が否定されてはいない。「X は R(B) ではあるが，真の意味での R(B) とは言えず，R(A) と言っても良い位である」と解釈するべきであろう。同様に(9)も「見なかったと言いきるわけにもいかないが，しかしむしろ感じとったと言う方が妥当である」と解釈される。また，

(13) il avait pris sa retraite ou plutôt il avait été pris par elle. (Laurent)

が明らかにするように，R(A) や R(B) を命題に置き換えてその真理値を云々することも plutôt 文の特性を明らかにするのには無効である。(13)は次の

(14) Maigret put enfin s'asseoir, se laisser tomber plutôt dans le fauteuil de son bureau, et Lucas entrouvrit immédiatement la porte. (Simenon)

と類似した例で，(14)は R(B) のディフォルト解釈，つまり行為の全過程が意図的コントロールの下に行われたという含意を排除して，コントロールが部分的にしか働かなかったことを主張する。これが「真の意味で R(B) とは言えず，むしろ R(A) と言った方が妥当である」の解釈を引き起こしている。他方

(15) --Si tu étais avec Jean plutôt qu'avec moi?
--Tu sais bien que j'aime Jean. (Laurent)

では，R(B) = 〈toi être avec moi〉 が発話時点に於ける事実であり，否定の対象になっているわけではなく，それに対し R(A) = 〈toi être avec Jean〉 は反実仮定の条件を表すもので，〈A au lieu de B〉 で置き換えられる。

(15) a. Si tu étais avec Jean au lieu d'être avec moi

これを次の様に変えると

(15) b. Tu es ici avec moi plutôt qu'avec Jean, je te le rappelle.

je te le rappelle が明示化している様にこの文の R(B) = 〈toi être avec Jean〉 の構築主体 S(R(B)) は tu に当たる主体と同定され，je に当たる主体と同定される S(R(A)) がこれに反論している。この様なケースで初めて R(B) が否定されていると言えるかもしれない。しかしより正確には R(B) は単に選ばれなかった選択肢として再録されただけだと言うべきだろう。

(15b) と(6), (9), (13)-(14)との違いは後者では R(A) も R(B) も時空間に位置づけられる X をどの様に分類・形容するかが問題になっているのに対し，前者では異なる指示対象についてそのいずれが時空間に事実として位置づけられるのかを問題にする処にあり，それ故に (11a) のタイプのパラフレーズの I prefer to say/assert that R(A) and deny that R(B) は異なる理由で (15b) のタイプにも(9)のタイプにも不適切である。(15b) のタイプでは前半部分を I say/assert that R(A) と変えるべきで，(9)のタイプでは and で始まる後半を変えて I prefer saying R(A) to saying R(B) の様にすべきだろう。次の

(16) Alain était un homme séduisant mais ce n'etait pas, chez lui, ce qui l'avait attirée. C'était plutôt le regard qu'il avait posé sur elle lors de ce fameux cocktail (Oriol)

では先行文に現れる R(B) = 〈〈Alain être un homme séduisant〉 attirer elle〉 が明示的に否定され，その後で R(A) = 〈〈le regard...〉 attirer elle〉 が断定されている。このタイプは (11a) のパラフレーズが有効である。この例では plutôt を抜かしても意味がほぼ保持されるが，I prefer to say that R(A) の prefer の解釈が消えてしまう。それに対し

(17) Mais parce qu'elle avait l'impression qu'elle ne l'interessait absolument pas—que, bien plutôt, elle l'agaçait—, elle s'était employée à oublier cette soirée. (Oriol)

では R(B) = 〈elle l'interesser〉 が否定されて R(A) = 〈elle l'agacer〉 が

elle の印象の内容として断定されているが，語彙的対立と共に plutôt が bien で強められていることから，I prefer to say の解釈は出て来ない。これがよりはっきりするのは単純な言い間違いの訂正の

(18) --Mademoiselle, indiquez-nous votre adresse, nous vous écrirons, ou plutôt, corrigea-t-il, nous vous déposerons ; il est tard. (Laurent)

などで prefer の介入の余地はない。以上の観察から (11a) のパラフレーズは必ずしも有効ではなく，prefer のステータスも明瞭とは言えないことが分かる。

(α2) を観察をつけ加えながらまとめて見る。

(i) S(R(A))は断定主体と同定されることが多いが，S(R(B))はこの断定主体と異なる。物理的に同一人物が R(A) も R(B) も構築している場合でも，S(R(A))を断定する主体は S(R(B))と区別される。〈B, ou plutôt A〉の形は(18)のように言い誤りの訂正に用いられるが，〈ou plutôt A〉で R(A)を断定する段階で，S(R(B))と異なっている。

(19) La seule chose que j'aie encore à vous demander concerne notre gardienne ou plutôt concierge puisqu'elle préfère ce titre. (Laurent)

では S(R(B))がまず発話主体と一致し，次に S(R(A))が concierge であることが明示されているが，断定主体は S(R(A))の立場を取る。

(ii) R(B)のステータスは既に構築された関係の再録である。これは R(A)の表現の以前に実際に R(B)が発話されなかったとしても比較の基準として構築されなければならない。この R(B)が必ずしも denial の対象にはならないことは繰り返し述べた。〈B, ou plutôt A〉，〈B, A plutôt〉，〈non-B, mais (bien) plutôt A〉など表現される B が位置的に A に先行する場合は明かであるが，〈A plutôt que B〉という順序の時でも B のステータスは変わらない。次の例は一見反例である。

(20) (招待状に手書きの地図が添えてあった) ladite carte ne pouvait qu'embrouiller toute personne habituée à consulter les publica-

tions courantes de l'Institut national de Géographie plutôt que des cartes marines du XVIIe siécle. (P.D. James)

17世紀の海図については先行コンテクストでは全く問題にされていない。〈que B〉の表現なしにはこの文は解釈が困難となる。辞書類はこのタイプの例文を挙げていないが，解釈上はクラス対比が表現されている。つまり〈C1 habitué à consulter les publications courantes de l'ING〉と〈C2 habitué à consulter des cartes marines du XVIIe s.〉という2つのクラス構築があり，〈ladite carte embrouiller X〉のXの位置にC2よりもC1が来た方，つまりR(A)がより妥当であることが表現されている。このクラス構築は toute personne という不特定表現が可能にしているもので，ceux や les personnes で置き換えられるが Jean とか mon ami のような特定表現では不可能である。構築されたクラスは主文に組み入れられこの段階で妥当性が問題にされるのである。

本題に戻ると，R(B)＝〈ladite carte embrouiller C2［＝ceux habitués à consulter des cartes marines du XVIIe s.］〉がR(A)構築時に既に構築されている関係だと言う根拠は何だろうか？　コンテクストを見ると招待状に添えられていた地図が非常に解読しにくいものだと言われている。そこから類似を誇張することによって17世紀の海図が現れるのである。この類似は

(21) ceux qui peuvent lire des cartes marines du XVIIe s. sont les seuls à s'y retrouver dans cette carte

の様な関係に支えられる。まず "ceux qui consultent cette carte" でC2'というクラスを作り，ここから "ceux qui sont habitués a consulter des cartes comme celle-ci" という拡大クラスC2" を作り，des cartes comme celle-ci を des cartes marines du XVIIe s. で置き換えるとR(B)が得られる。レトリック操作には興味深いものがあるが，これ以上立ち入らない。ポイントは〈moi lire cette carte〉という既構築の関係から出発して carte の特性からクラス構築が行われることで，R(B)はその意味で既に構築されたものである。

(iii)関係Rが変項Xを含む時これをR(X)で表すと，このXにBが代入される時Aで置き換えてR(A)とした方が妥当であることをplutôtが示す。A, Bと表記したものは関係の中の1項であり，談話構造から言うと焦点に当たるもので，場合によっては関係そのものと一致するが，例え1項を表す時でも関係に送り返している。訂正用法での妥当性には2つのケースがある。

第1のケースはR(B)が誤りでR(A)が正しいというもので妥当性は事実に根拠を持つ。(15b)がこの例で，S(R(B))がtuに，S(R(A))がjeに固定されていて，既構築のR(B)を認めないことによってS(R(A))がS(R(B))に反論，反ぱくする。また(18)の様な言い間違いの訂正では同一人物が構築してしまったR(B)を否認することになる。第2のケースはR(B)を部分的に否定し，より正確なR(A)を用いて表現するケースで，Xの命名・分類に関わる。大切なのはR(B)が単に否定されるのではなく，むしろR(X)を真の意味でのR(B)と考えることが拒否されているという点である。第1用法ではR(B)が成立しないことがポイントだったが，ここではR(B)がR(A)を構築しない限りディフォルト解釈を受けてしまうので，それを阻止するという機能を持つのである。

3．2． preferenceの解釈（α1）

（α1）はR(A)が想像上構築された関係であり，願望，勧告，依頼などのモーダルなコンテクストに現れる。R(B)は既に構築された関係であり，事実なのか，想像上の構築なのかなどのパラメターと，S(R(A)), S(R(B))の主体のパラメターによって反発，絶望，遺憾など様々な情意を表現する。ここで受益主体BEN（=bénéficiaire）という主体を新たに導入する必要がある。例えば，

(22) plutôt que de me fâcher, je préférai leur rire au nez [...] (Laurent)

ではS(R(A))が発話主体のjeと同定されるが，このpréférerの主体は同時にBENである。Cf. Franckel & Lebaud (1991)。Thompson, Dietrich & Napoli, Traugott & Königもpreferenceの主体は文主語であるとしている。さて，

(23) Assez calé en grec ancien, il avait appris un peu de grec moderne [...],pour le plaisir d'agacer ses trois despotes qui lui conseillaient de se perfectionner plutôt en anglais. (Laurent)

の様な例では BEN は conseiller の間接目的語で, se perfectionner の行為主体でもある。これを構文論的に主語と見なすことは可能だろうが，問題はむしろ BEN と S(R(A))との関係である。(23)では BEN が il で S(R(A))が trois despotes である。また,

(24) Tu ferais mieux de partir tout de suite plutôt que de traîner comme cela.

の BEN は tu で S(R(A))は発話主体である。同様,

(25) Vous allez lui dire ceci, et textuellement : Sybille, plutôt que de t'installer chez David, suicide-toi, au moins ce sera rapide. (Laurent).

は主節が命令文であり，コンテクストからこれは Sybille が R(B)を成立させないことを勧告していることが分かるが，BEN は Sybille で S(R(A))は発話者である。

(α1) では R(A)と R(B)が相入れない2つの関係であり，S(R(A))は BEN にとって R(A)成立が R(B)成立より望ましいと評価する。従って R(A)は事実として成立していることはなく，S(R(A))が構築を担っているに過ぎない。事実としての妥当性に支えられる訂正用法と異なり，(α1)では R(A)か R(B)かの一方が選択されると他方は排除される。訂正用法では真の意味では R(X)を R(B)とするのが適切さに欠けるので R(A)とすることがあったが，(α1)では R(A)が単に事実として提出されることはない。また R(A)は BEN による意図的選択が可能な関係でなければならず，そして S(R(A))が R(A)の成立を望んでいることが明示されなければならない。(25)や次の例の命令形,

(26) Une bourrasque imprévue les bouscula, porteuse de grosses gouttes de pluie tiède. Devant eux s'ouvrait la terrasse d'une taverne.

--Plutôt que de nous faire arroser, dînons ici. (Laurent)

(22)の préférer, (1)の aimer mieux, (23)の conseiller, また(28)の proposer :

(27) [...] lui proposant de se divertir dans tes bras plutôt que de plonger dans l'eau froide (Laurent)

(24)の faire mieux の条件法，等々様々な形態を通して R(A)が望ましいことが示される。

しかし

(28) Plutôt que d'attendre sur le trottoir, il se dirigea vers le bar (Simenon)

では単に R(A)が意図的行為であることが明示されているだけである。これは Il choisit de valider R(A)と解釈される。最後に

(29) Nadine observait ce profil sec qui se découpait sur du noir, [...] et pensait : plutot mourir célibataire que de tomber dans les griffes d'un tel salaud. (Oriol)

の様な〈Plutot A(que de B)〉で A，B が不定法の用法を見ておこう。このタイプは感嘆文に現れ，R(B)を強く拒否するもので，BEN, S(R(A))，発話者が同定される。A には mourir が頻繁に現れ，「R(B)を成立させるくらいなら死んだ方がましだ」の解釈である。つまり R(A)として望ましくない関係を作り，それによっていかに R(B)が強く拒絶されるかを示す。

3．3． 特性の存在（β1）

1．で（β1）の「特性の存在」と（β2）の「強い程度」の解釈があることを見た。この2つは R(B)に当たるものが表現されず，この内（β1）は passablement, assez, pas mal などが類義語とされる。(3)や，

(30) --Votre sœur ne parle pas beaucoup.

--Elle est plutôt sauvage, mais c'est une brave fille. (C. Arlet)

などがこの例だが，この用法は(8)で述べたように表面的には B が単に A の否定である訂正用法（α2）の一種とも見なせる。（α2）では R(A)が事実として R(B)よりも妥当なことを表現した。単に「R(B)ではなくて R(A)だ」という解釈ではなく，「R(B)が適切に見えるが，R(A)と比較すると R(A)

の方がより妥当である」ことを意味するのである。この場合はR(B)が文中〈que B〉の形で，またはコンテクストに表現されていたが，(8)や(29)の(β1)ではR(B)がこの様な形では見いだせない。より大切なことは，(α1)ではR(A)とR(B)が質的に異なった関係を示していることである。これに対し(β1)では両者がAで表される特性の存在／非存在で対立していて，これが量的解釈の基盤となっている。

例えば(29)ではまず「あなたのお姉さんは余り話しをしない」という指摘があり，「彼女はどちらかというと人づきあいが悪いが良い人なのだ」と弁護する。始めの指摘はR(A)の〈elle être sauvage〉で説明される内容で，R(B)の構築を準備するようなものではない。

さて(8)は新たに導入した人物の描写で，(30)も始めて会った人物についてその弟が説明している。次の例では，

(31) De retour à la librairie, je choisis un carnet d'un format plutôt petit, celui d'une poche à peu près, dont les pages étaient quadrillées (Laurent)

ディスコースの中で新しい要素の導入部分に現れている。また新たな状況での要素の描写や状況の紹介，評価にも現れ得る。

(32) Vous avez retrouvé bien vite le chemin de la gendarmerie. De la part d'un type qui vient de se faire étriller aussi durement, c'est plutôt bizarre...(Gerrard)

注目すべきことは，Aが特性を示す形容詞などの時の機能の仕方である。Aが属詞的に用いられている時は問題ないが，付加的に用いられている時は形容の対象の名詞は不定名詞句でなければならない。

(33) a. J'ai rencontré une fille plutôt gentille.
b. *J'ai rencontré la fille plutôt gentille.

次の2例も参照されたい。

(34) elle portait une robe plutôt courte et tres large (Laurent)

(35) Ma robe qui était plutôt longue et étroite ne facilitait pas la tâche de mon professeur (Laurent)

形容詞が目的語属詞や同格として用いられているなら定名詞句は許される。

(36) Je trouve le juge plutôt sympathique.

(37) Mes parents, plutôt gentils, étaient instituteurs dans un bourg situé à une trentaine de kilomètres (Laurent)

これは〈plutôt A〉で示される特性だけで名詞の指示対象を同定する機能を持たないことを示す。他の限定によって対象が同定されることは問題がない。

(38) J'ai réfléchi au problème plutôt délicat que vous avez présenté hier.

(39) L'histoire plutôt triste de Jean a bouleversé Marie.

assez は plutôt よりも緩いが類似の拘束を持つようである。この観察の背後にはより一般的な形容詞の問題がある。Thompson (1988) が異った観点から問題提起しているのを参照されたい。

さて上に見た拘束は plutôt が特殊な機能を持つことを示唆する。ここで提出する仮説は次の様なものである。〈plutôt A〉はある対象を A という特性で表現される領域に位置づける。この特性 A は程度変化を持つタイプで，様々な程度を許容する。A の構築と同時に A でない領域も構築される。non-A, autre que A と表現される領域で，Culioli (1990) などが complémentaire, extérieur と呼ぶものである。これを B としよう。すると〈plutôt A〉は先に見てきた〈A plutôt que B〉の形に還元できることになる。例えば(30)では A が "être sauvage" という特性が有効な領域で，B は "ne pas être sauvage" と規定される領域である。plutôt は対象を A の領域に位置づけると同時に B 領域と，2つの領域の境界線とを構築する。(30)では elle を境界線よりも A の側に位置づけることになる。但し elle が A 領域にあることを言うだけで，領域自身にはより強い程度，より弱い程度など様々な下位領域があるが，elle がどの度合いを持つのかは言わない。実際(30)は elle が非常に sauvage な可能性もたいして sauvage でない可能性も許容する。不可能なのは sauvage ではないケースで，これは完全に排除

される。（α1）と（β2）ではR(B)が既構築であるとしたが，R(B)と質的に異なるR(A)を構築することによって2つの領域を作っていたのである。これに対し（β1）ではBが既構築である必要はなく，Aに付随して構築され，程度という量的な観点からAに対立する。

否定を伴う

(40) a．Celle-là, elle (n') est plutôt pas belle.

b．Marie, intelligente mais plutôt pas belle, dut y renoncer.

では plutôt が否定のスコープに入らず，入れようとすると非文になる。

(41) a．*Celle-là, elle n'est pas plutôt belle

b．*Marie, intelligente mais pas plutôt belle, dut y renoncer

（α）用法でも否定は複雑な拘束があるが，特に（β1）ではBと対比されるAの領域を新たに構築することをマークするので，(33b)が示すように既構築の特性による対象の同定には用いられず，否定の対象にもならないのである。

最後の観察だが，（β1）ではAがtrès, assez, tropなどの程度表現と共起しうる。

(42) Jean se demanda [...] si le mot phénomène n'avait pas été employé dans le sens kantien, mais comme il se souvenait plutôt très mal de ce sens, il préféra faire un acte d'une courageuse indiscrétion (Laurent)

(43) D'habitude, quand un drame comme celui-ci se produit, dans une famille, on trouve tout le monde près du corps, des gens qui pleurent, d'autres qui expliquent, qui parlent plutôt trop... (Simenon)

これはAが様々な程度を許容することから起こる現象で，Aの領域は〈Jean s'en souvenir très mal〉，〈d'autes parler trop〉など表現された程度及びそれ以上の程度のA領域である。つまり境界線は〈Jean ne pas s'en souvenir très mal〉と〈Jean s'en souvenir très mal〉を隔てるもので，passablement, assez, pas malなどがA領域の連続的程度変化の中で対象

を位置づけるのと異なり，B構築を通して2つの領域を非連続的なものとする。

3．4．　強い程度（$\beta 2$）

（$\beta 2$）の「強い程度」解釈については辞書類は très, beaucoup を類義語として挙げ，par euphémisme とか par litote とコメントを加える。特殊なイントネーションを伴うので，

(44)　Le 547e si je l'connais! plutôt（*TLF*）

(45)　Ça la fout mal.---Oui, plutôt（*GR*）

(46)　Il est plutôt casse-pieds（*GLLF*）

や(4)などの例が挙げられているが，くだけた表現法ということで，コンテクストは話し相手の存在を想定させるものである。(44)や(45)には，R(A)が当然であるという文脈がある。R(A)が明らかな事実の時わざわざ〈plutôt A〉でA領域への位置づけを表現することから，強い程度や皮肉の解釈が生まれる。次の例は Maigret 警部が部下を叱責する場面である。

(47)　--Va trouver ton commissaire et demande-lui de recommencer les choses selon les règles.

--Je dois?...

--Parbleu! Je ne tiens pas à ce que les avocats prétendent que c'est nous qui avons planté les billets où tu les a pris.

--J'ai commis une gaffe?

--Plutôt.（Simenon）

部下の方は自分の間違いになかなか気付かないが，Maigret にとっては歴然としている。最後の答は Evidemment, Bien sûr と言うこともできる文脈で，Plutôt は「どちらかというとかなりへまだった」と言うので，典型的な曲言法 litote である。ところで(47)は（$\beta 2$）というより訂正の（$\alpha 2$）用法と言えないだろうか？ 部下の最後の質問は R(A) と R(B) を作るがどちらが成立するかを断定できないので Maigret に決定を委ねているわけで，R(A) と R(B) は肯定と否定の関係にある。典型的な（$\alpha 2$）用法の

(48)　--N'importe qui peut faire un étrangleur : toi, moi..."

Il la regarda boire :

"A la réflexion, plutôt toi que moi." (Oriol)

と(47)を較べると両方とも先行文脈でR(A)とR(B)が構築されている。但し(48)はR(B)がR(A)の否定なのに対し(47)のR(B)はR(B)と質的に異なる対象を導入していることと，そして(47)がYes/No選択から強い程度解釈「どちらかと言うと可成りのへまだった」が生まれるが(48)ではその様な解釈が不可能であることが両者を隔てている。つまり量解釈と質解釈の相違が(47)を（β2）と分類させるのである。

（β2）を2段階に分けて規定しよう。第1に「先行文脈または言語外状況でR(A)が構築されている時，R(A)の特性の非存在をR(B)として構築し，R(A)の方が妥当であることを表現する」，第2にこれに「この時R(A)が当然だと断定主体が了承していると，litote効果が生じて強い程度解釈となる」ということを加える。第1の規定で「言語外状況」を入れたのは(4)や(47)を説明するためであるが，この様な例は（β2）ではなくむしろ（β1）用法の可能性が高い。（β2）が感嘆文の色彩を帯びがちなのはこの規定から理解できる。R(A)とR(B)から出発してR(A)を選択し，これを出発点のR(A)と同定する，という操作が感嘆文の構築である。また疑問文が（β2）に現れえないこともここから説明がつくのである。

4．結論にかえて

冒頭に述べたようにTraugott & Königは何故「より早く」が（α1）の様な意味派生を生んだのかについて，派生の出発点でthe sooner the better という談話的含意が言葉の意味に組み入れられたものとした。スペイン語のantes "avant" も類似の派生を示している。次に（α1）から（α2）の派生ではR(B)の否定という同じく談話的含意に依るとした。

しかしながらplutôt記述に援用した様々なパラメターを考えるとこの「伝統的」な解釈と異なる仮説が可能になると思われる。ここでは結論に代えて研究方向の示唆を提示する。

時空間に於いてR(A)がR(B)に時間的に先行する(R(A) plus tôt que

R(B))ならば，R(A)はR(B)が成立する以前に既に成立する関係であり，従ってR(B)が成立していれば必然的にR(A)も成立しているが，逆にR(A)が成立したからといってその時点ではR(B)の成立は保証されないのである。この時空間での事実関係を想像界に転じると，préférance を示すコンテクストではR(A)が実現がより望ましい関係として現れる。つまりthe sooner the better という純粋に談話的含意がたまたま意味に取り入れられたのではなく，むしろより必然的な関係を時間的解釈と（$\alpha 1$）との間に認めるのである。次に（$\alpha 2$）用法だが，これは plutôt の時間用法から直接派生できる。問題はむしろなぜこの用法が（$\alpha 1$）より先に出現しなかったのかであり，文献学的調査が必要である。

（β）用法は（α）でのR(A)とR(B)の質的解釈を量的解釈に移したものであり，上の記述から容易に再構成できる。

tôt の比較級は aussitôt, moins tôt, tantôt など問題が多く，また bientôt も問題を提出する。文献的調査と理論的枠組みの構築と精密化が将来の課題である。

（注１）　この例は（$\alpha 2$）の訂正用法とも解釈できるもので，（$\alpha 1$）と（$\alpha 2$）との連続性を強く示唆する。3.2.で詳しく論じる。

［文献］

作例以外の引用例は紙数の関係上例文の後に著者の名前だけを挙げておいた。以下は研究文献である。

BENVENISTE, E. (1948) : *Noms d'agent et noms d'action en indo-européen*, Paris, A. Maisonneuve.

CULIOLI, A. (1990) : *Pour une linguistique de l'énonciation. Opérations et représentations*, tome 1, Paris, Ophrys.

DIETERICH, T.G. & D.J. NAPOLI (1982) : "Comparative *rather*", *Journal of Linguistics*, 18.

FRANCKEL, J.-J. (1989) : *Etude de quelques marqueurs aspectuels du français*, Genève, Droz.

FRANCKEL, J.-J. & LEBAUD. D. (1990) : *Les figures du sujet. A propos des verbes de perception, sentiment, connaissance*, Paris, Ophrys.

RIVARA, R. (1990) : *Le système de la comparaison. Sur la construction du*

sens dans les langues naturelles, Paris, Ed. de Minuit.
SWEETSER, E.E. (1990) : *From etymology to pragmatics*, Cambridge, Cambridge Univ. Press.
TAYLOR, J.R. (1992) : "Old problems : Adjectives in Cognitive Grammar", *Cognitive Linguistics*, 3-1.
THOMPSON, S.A. (1972) : "*Instead of* and *rather than* clauses in English", *Journal of Linguistics*, 8.
THOMPSON, S. A. (1988) : "A Discourse Approach to the Cross-Linguistic Category 'Adjective'",in J.A.Hawkins(ed.) : *Explaining Language Universals,* Oxford, Basil Blackwell.
TRAUGOTT, E.C. & KÖNIG, E. (1991) : "The semantics-pragmatics of grammaticalization revisited", in Traugott, E. & B. Heine (eds.), *Approaches to Grammaticalization*, Vol. 1, Amsterdam, J. Benjamins Publ. Co.